

若者の投票率向上のために

～3つの具体的事例の提案～

群馬県立沼田高等学校 1年 橋爪 美真^{はしづめ うらま}

1 はじめに

私は選挙や政治に興味がある。そのため新聞やテレビのニュース番組で政治的な話題に触れることが多い。しかし、同じ世代の友人と政治の話をする機会は極めて少ない。一般的に若者は政治への関心が低いと言われるが、政治の話をする機会がないため、実際に回りの友人たちが政治に関心を持っているのか、持っていないのか判断することもできないというのが実感である。

2019年7月21日に選挙権年齢が18歳に引き下げられてから2度目の参議院選挙が行われた。前回の2016年の参院選時、私はまだ中学生だったが、今回は高校1年生となり、もうすぐ選挙権が与えられることから、自分が主権者の気持ちで選挙の様子を見守ることにした。特に注目していたのは私たち若い世代が日常的に使用しているTwitterやYouTubeなどのSNSを使った選挙に関する活動である。例えば、社会問題を「お笑い」を通して楽しくつたえ、関心を持ってもらうことを目的に設立された、「笑下村塾」¹のお笑い芸人である「たかまつなな」さんは「選挙に行かないと若者は損？(7月17日)」、「本日投票日の禁止事項(7月21日)」という題名で動画を投稿し数千回以上の再生回数となり注目された。動画の中でたかまつさんは、若者が選挙に行けば、政治に若者の意見が反映されることについて詳しく触れ、選挙当日に特定の候補者を応援する内容のツイートを控えるなどのSNSの注意点などを呼び掛けるなどした。またその他に、「若者よ、選挙に行くな」という動画が40万回以上再生され、インターネット上のみならず、テレビや新聞などにおいても取り上げられ国民的な話題になった。

参院選に向けたインターネットメディアを使用した、上記のような動向に着目していると、若者もそれなりに政治に関心を持ち、選挙に足を運ぶのではないかと考えるようにな

¹ 「笑下村塾」ホームページ <https://www.shoukasonjuku.com/>

った。しかし、参院選における若者の投票率は 18 歳が 34.68%、19 歳が 28.05%²と低い結果に終わった。なぜ若者は選挙に行かないのか、投票率を向上させるにはどのような取り組みが必要なのか考えることにした。

2 投票率の向上のために

(1) 電子投票

私たちは日常的にスマホやタブレット、パソコンでインターネットを使用している。インターネット上で買い物をしたり、自分の考えを自由に発信、受信したりすることはもはや生活の一部となっている。それ以外にも、振込や株式投資などの金融サービス、旅行やレストランなどの予約などの他、最近は Uber Eats などのサービスでは出前の注文までスマホ 1 台で可能になっている。インターネット回線とスマホが 1 台あれば、何でもできることが普通になりつつある。しかし、スマホを使い、自分のいる場所であらゆるサービスを利用できることになれている私たちにとって、未だに投票所で行き、紙に鉛筆で記入するという選挙の方法は不便で前近代的なものに感じてしまう。

そこで、私が提案したいことは、エストニアで行われている電子投票³の導入である。エストニアの投票はパソコンと政府が発行する ID カードを使って行われる。選挙はインターネット上の選挙用のサイトから専用のソフトウェアをダウンロードし、ID カードに記載されている番号とパスワードを入力して候補者を選ぶことで行われる。買収などの不正を防ぐ為に、一度投票を行っても選挙期間中であれば投票先を自由に変更することができる。電子投票により、だれでも自宅にいながらにして手軽に投票ができるという大きなメリットが得られる。また、電子投票は投票だけでなく、開票の際のメリットも大きい。現在の紙による投票方法は、投票所の運営と開票作業に非常に大きなコストがかかっている。開票作業で用紙を広げ票を数える時間や人手を削減することができる点は電子投票導入の大きなメリットの一つである。その他にも、誤字や書き損じで無効となる票を無くすることもできる。今回の参議院選挙では、私の住む沼田市の投票総数 1 万 9740 票のうち、1315 票 (6.66%) が無効となった(雑字を記載したものが 719 票、記号や符号のみ書いたものが 70 票であった。)。このような無効票を 1 票でも少なくすることができれば、より政治に民意を反映させることにもつながる。

² 総務省ホームページ http://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/data/sangiin24/index.html

³ 湯浅 壘道 2009 「エストニアの電子投票」九州国際大学社会文化研究所紀要

一方、電子投票には課題もある。まず1つ目は、悪意あるハッキングによる投票数の改ざんの危険性があることだ。実際に、2018年3月、米国フロリダ州の11歳の少年がイベントで、オンライン選挙サイトにハッキングし、わずか10分で投票数を改ざんする様子を実演するという出来事があった。2つ目は、どこでも投票が行われるため、秘密選挙の原則が守られるのか疑問があることだ。家族や恋人同士であれば、相手が投票先を決定する画面をのぞき込んだり、スマートフォンの履歴をチェックしたりすることもそう難しくないはずだ。

電子投票はまだまだ不確かなことや不安な点が多く、改善しなくてはならない点がある。しかし、どこにいても選挙に参加できることは、選挙に行くのが面倒だと感じている若者にとってとても魅力的であり、投票率の向上にも役立つはずである。そして電子投票の導入は、若者のみならず、怪我や障害を持つ人や介護や育児に追われる人、高齢者等の負担を軽減することにもつながる。電子投票の導入は、政治への参加を促す上で大変重要であると考えている。

(2) 移動投票車

投票率向上のための取り組みの1点目として電子投票の導入を上げた。電子投票は投票票に関わる手間やコストを削減し、若者の投票率の向上にも役立つはずだと述べた。しかし、実際に導入するためには、先に述べた課題を克服する必要がある他、システム導入のための予算確保や、法律の整備などに相応の時間が必要であり、次の選挙で実施するというのは現実的でない。

電子投票以外に、より短い時間と低いコストで取り組める、投票率向上のための方法がないか、考えてみることにした。いくつかの書籍やインターネットなどで調査を進める中で、私の目にとまったのは、地元の沼田市ですでに稼働している移動投票車について紹介している広報誌であった。群馬県の12市の中でも特に高齢化、人口減が深刻な課題となっている沼田市では、市長選、そして今回の参議院選挙、知事選挙で移動投票車を導入したことが紹介⁴されていた。平成20年度に行われた投票所の見直しで、投票所の数が41から35へ減少したため、投票所が自宅から遠くなってしまい、特に高齢者を中心に投票に支障が出るケースが想定されるようになった。移動投票車が以前投票所として使われていた公

⁴ 「広報ぬまた」2019年7月号5頁

民館等を周って、投票者の負担を軽減する仕組みということであった。現状では山間部に住む高齢者の投票の利便性を向上させることを目的にしている移動投票車であったが、私はこの仕組みをもっと活用することで、若者の投票率向上にも役立てられるのではないかと考えた。有権者となる高校3年生は受験勉強や就職活動などのため学習塾での勉強、試験対策に忙しく、時間のやりくりに追われている人が多い。そのため、移動投票車が昼休みや放課後に学校に来てくれれば非常に便利であり、投票しやすい環境となるだろう。友人を誘って投票へ行きやすくなり、選挙に参加するきっかけ作りにもなると考えたのだ。そこで、この移動投票車の仕組みについて詳しく知るため、沼田市選挙管理委員会の見城俊彦さんに直接お話を伺った⁵。移動投票者の運用にあたり、LAN回線で各投票車と事務所を結んで管理しているため、二重交付が起こらないシステムとなっていること、実際に投票車に投票に訪れた有権者からは、『すぐ近くまで来てくれてありがたい』と感謝の声が多く寄せられていることなどが分かった。また、見城さんに、若者の投票率向上のために昼休みや放課後の時間帯に学校で投票車による投票ができないか、意見を伺ってみた。すると、今後は高校で投票車による投票を行うことも考えていきたいということであった。選挙管理委員会としても、若者の投票率向上のための方法を模索しており、興味深い提案であるとのことをご意見をいただいた。

一方、話を伺う中で移動投票車の課題についても教えていただいた。投票スペースが限られるため、多くの投票者が押し寄せると対応が難しいことや、雨や風などの天候に大きく左右されること、道路の混雑や渋滞を避けるため早朝から準備しなくてはならないことが、現状の課題であるということであった。

移動投票車を運行するという選挙管理委員会からの働きかけによって、高齢者だけではなく、高校生や若者が選挙に参加しやすくなり、様々な人の投票機会の確保ができることが期待されることが分かった。

(3) 投票用紙の工夫

これまで電子投票と移動投票車の導入についての提案を行った。この2つは、すでに他国で実施事例があるか、既にある仕組みの運用方法を工夫する内容であった。3つめは私が個人的に考えている内容について提案を行いたい。

⁵ 沼田市選挙管理委員会を訪れヒアリング調査を行った。

現在の日本の投票方法では、投票したい候補者や政党が存在しなかった場合や、どこに投票していいのか判断できなかつた場合に、その意思を表明する方法が限られている。具体的には、投票に行かないか白票で投票するかの2つである。明治大学特任教授の藤井剛⁶ (2016)によると、ある自治体の調査で「政治が難しく誰に投票していいのか分からないから選挙に行かない」と答えた高校生は33.2%もいるということである。そのため、「政治に関心はあるけれどまだ難しい」と考えている若者が投票に行かなかつた結果、「若者の投票率が低い＝若者は政治に関心がない」と誤解を受けてしまっている状況があるのではないだろうか。

こうした状況をただしく選挙結果反映するために、投票の際に「棄権」を選択できるようにしてはどうだろうか。「棄権」の意思が表明できるようになることで、「政治に関心はあるが、難しく判断できない」と考えていたり「投票したい候補者(政党)がない」と考えていたりする有権者の声を拾えるようになると考えるのである。また、政治を行う側にとっても、投票率が向上したのに「棄権」票が増えたとすれば、政治のわかりやすさや魅力を向上させる必要があるというメッセージになるのではないだろうか。

3 まとめ

私は政治や選挙に関する興味が、一般的な若者よりも高いと冒頭で述べた。しかし後2年ほどで18歳となり、実際の選挙に参加すると考えた時、果たして自分に適切な判断ができるのだろうかと不安を感じる。その点について、公民科の担当の先生に話しを聞いてみると、「最初は誰もが選挙の初心者である」ことや「大人も必ずしもよく考えて投票している人ばかりではない」ということを教えていただいた。また、明治大学の藤井教授は、以前私の所属する沼田高校で主権者教育を実施したことがあり、その際の新聞の取材に「興味のあるテーマ2・3個にしぼって投票先を決めればよい」⁷と答えている。これらの話からすると、政治を専門に扱う高校の先生や大学教授も、「難しく考えすぎず選挙に参加すること」が重要であると考えているようである。つまり、まずは選挙に参加してみて、選挙の結果や当選した政治家について着目するなどするなかで、徐々に政治に対する興味を深め知識をつけていけばよいということではないだろうか。今回私が提案したのは「電子投票の導入」、「移動投票車の活用」、「投票用紙の工夫」の3点である。3点それぞれに、実

⁶ 藤井剛 2016 『主権者教育のすすめ』 清水書院 13頁

⁷ 毎日新聞 2016年7月16日記事

際に導入するとなると大小様々な課題が生じることは明らかである。しかし、「選挙は難しい」、「選挙は面倒だ」、「誰を選べば分からない」と考えてしまう若者を、まずは投票に向かわせる工夫が必要不可欠である。まずは投票に行くというハードルを下げるために、選挙に参加しやすい仕組みを整えるための取り組みを続けていくことが重要であると考えている。

【参考文献・論文】

(論文)

湯浅 塾道 2009 「エストニアの電子投票」九州国際大学社会文化研究所紀要

(文献他)

藤井剛 2016 『主権者教育のすすめ』 清水書院

岩波新書編集部 2016 『18歳からの民主主義』 岩波新書

「広報ぬまた」2019年7月号